

農業関係高校の魅力と農業クラブの活動を、 小中学生を含めた地域に発信するにはど のような方法があるか。

クラブ員代表者会議 中国ブロック連盟 岡山県立興陽高等学校
造園デザイン科 3年 花房 亮
造園デザイン科 3年 竹浪 彰人
農 業 科 2年 西田 建太

1 岡山県内の農業高校と興陽高校の紹介

岡山県には農業系学科のある学校が8校あり、様々な地域の特性を生かした取組で頑張っています。

その中で、私たちが在籍する岡山県立興陽高等学校は県南にある児島湾干拓地の藤田地区に位置します。本校は農業と家庭に関する学科が併設されている学校で、農業系学科が3クラス、家庭系学科が2クラスあります。農業系学科は農業科、農業機械科、造園デザイン科があり、農業科では作物・果樹・野菜に草花・畜産を含めた複合経営農業を学習し、農業機械科は農業機械の操作やメンテナンスといった農業と工業の融合した学習を、造園デザイン科は造園のスペシャリスト育成を目指した学習を行っています。本校の敷地面積は約31haあり、農業用の耕地は約23haあります。このうち約15haは水田であり開校時から土地利用型の大規模農業を展開しています。



2 興陽高校の特色ある活動内容1 (ESDフィールドワーク)

興陽高校ではESDの取り組みを行っています。『ESD』とは、Education for Sustainable Development = 持続可能な開発のための教育の略で、一人一人が社会のあり方や価値観を見直し、持続可能な社会をつくるために、未来に向けて考え、話し合い、学び、行動していく取組のことを言います。これは、岡山市域は国連大学から世界の他の6地域とともに世界で初めてESDを推進する地域拠点に認定されたことに端を発します。



興陽高校がある岡山市南区藤田地域は県内有数の農業地帯で、水稻を中心に栽培が行われていますが、農業者の高齢化が進み、耕作放棄地も増加しています。実際景色として水田を見ることはあっても関心を持たない若者が増えているのです。この藤田地域を1つの集団として見たときに、小学生などが若い時期から地域に興味を持って、地域後継者となり、さらに、将来にわたり藤田地区で農業が産業として継続・発展するために若い農業者として当地域に定住、就農するようになることがE S D活動で、近隣の小学校は積極的に活動を行っています。

興陽高校では地域の小学校の協力要請に応じ、藤田地区の農業発展プロジェクト活動として、E S Dフィールドワークに参加しています。これは、小学生とともに地区の農家さんを訪れて、農業を学習するとともに、この地区の農業をどう守っていくかなど、農家さんの地区や農業に対する思いや苦労話、そして、やって良かったという話をさせていただき、小学生の興味関心を引き出すというものです。そのために、農家さんを回る前に事前に打合せを行い、質問の内容を一緒に考えたり、品目を調査したりして、交流を深めています。

3 興陽高校の特色ある活動内容2（家庭クラブを含めたサツマイモ苗植え・収穫交流）

本校には家政科があり、農業科と合同で、近隣の保育園児とともにサツマイモの苗植えおよび収穫交流を行っています。これは、家庭クラブの保育分野と農業クラブの野菜類型のコラボ企画で、互いに学習活動を共有しながら、保育園児と交流学习を行う内容です。保育園児との接し方について家庭クラブに教わり、そして、サツマイモに関する知識を事前に打ち合わせし、協力して保育園児への指導を行います。

4 興陽高校の特色ある活動内容3（ファミリー稲作&スマート農業）

農業科ではファミリー稲作体験を行っています。目的は、地域の非農家を招き交流を深めるとともに、E S D活動の1つであるこの地域の小さい子供に対して、地域の農業を知ってもらうことを目的としています。

この行事の始まりは、藤田地区の非農家の家族から農業体験を行いたいという要望がわき上がってきたのがきっかけですが、今はT S C「テレビせとうち」が共催してくださり、田んぼのもつ役割をもっと身近に感じてもらえばということで、本校で取り組んでいた交流活動とコラボしています。毎年家族50組を募集していますが、非常に人気となっており今年度は76組262名参加の行事に成長しています。



ファミリー稲作体験を通してこの地域の幼い子ども連れの家族と交流することで私たち自身も稲作栽培の原点を再認識することができ、さらには、この子どもたちが農業の楽しさを知って、今後の農業を考えるきっかけになる意義のある活動だと考えています。

さらに、今年度はGPS直進自動アシスト田植機を登場させ、今後発展していくであろうスマート農業の紹介も行い、子供だけでなく、大人の方々にも興味を引く活動になりました。このスマート農業については、今後近隣の小学校に出前授業を行い、最先端の農業

を紹介する予定にもなっています。

5 興陽高校の特色ある活動内容 4

(造園デザイン科における後楽園出張庭造り・慈圭病院庭園づくり)

本校造園デザイン科は岡山県で唯一造園について学べる学科で、庭造りの基礎から、樹木の剪定、管理等を勉強しています。造園デザイン科では岡山県が日本に誇る日本三名園の1つである後楽園に日本造園組合連合会岡山県支部青年部とともに、毎年ゴールデンウィーク前に出張箱庭づくりを行っています。岡山市内の造園の若手技術者からの刺激を受け、技術向上を目指します。できあがった箱庭は、後楽園に来られた多くの人の目を楽しませています。また、後楽園が近隣の方の散歩コースや、小学生の遠足コースにもなっており、作庭中にも、多くの小学生や園児が見学に訪れ、造園の素晴らしさを伝えることができました。



また、興陽高校の近隣にある「慈圭病院」から、7区画分の庭園の計画・施工の依頼を受けて取り組んでいます。興陽高校では、2001年よりバリアフリー・ユニバーサルデザインの考えを取り入れた庭園施工を目指しており、今まで培ってきた知識と技術を活かし、主に精神科で治療を受けている患者さんや病院関係者の方々に満足して利用していただける庭園を4年計画で施工してきました。庭園をデザインするにあたり、先輩たちが施工している様子を見学し、苦勞やアドバイスをいただくことで年度ごとの庭園のバランスが壊れないように引継を行いました。また、利用者の意見を庭園に反映するためにアンケートを実施し、(病棟より出られない患者さんからは)見下ろして楽しめる庭園が欲しい、(また、職員さんからは患者さんと)コミュニケーションが図れる共通の話題になる庭園



が欲しいなどの意見を取り入れたデザインを考えました。これまで作庭した庭園には、病院のシンボルマークを取り入れた日時計や健康や長寿を願った鶴亀の庭園、令和の最初の年に完成することから、本年度の庭園は万葉集の歌にちなんだ植物を植栽した庭園などを今年11月の完成を目指して造っています。今年の8月27日には、地域の方々を招いて夏祭りが行われ、開かれた庭園として、活用していただきました。

6 興陽高校の特色ある活動内容 5 (造園デザイン科における世界らん展出場)

造園デザイン科ではさらに世界らん展への取り組みがあります。世界らん展日本大賞は、毎年東京ドームで開催されており、世界各国からも出場する日本最大の蘭の展覧会です。

2月中下旬頃に7日間にわたって開催され、10万人以上の方々が来場されています。この大会では個別審査部門をはじめ6つの部門からなっています。私たち造園デザイン科では、ディスプレイ部門に出展しており、毎年、興陽高校の作品を楽しみにされている来場者の方もおられます。制作にあたり、みんなで話し合っテーマを決め、デザインをし、図面を描きました。その後、計画に合わせて竹垣や竹を使用した構造物を制作したり、蘭をはじめとする植物の選定や手入れを行ったりしました。校内の文化祭等で制作に向けての模擬練習を行った後に、東京ドームへ乗り込み、限られた時間の中で展示物を完成させていきました。今年は、優良賞を受賞することが出来ましたが、それ以上に見に来られたお客様の反応は上々でした。



7 岡山県内の農業高校の特色ある活動内容

岡山県内の他の農業系学科がある学校の取り組みを紹介します。

高松農業高校は、学校版かわら版を作り、中学校や最寄り駅、役場などに配布して活動を知ってもらうようにしています。

勝間田高校や井原高校、真庭高校はわさび田復活プロジェクトやジビエプロジェクトなどを地元ケーブルテレビや新聞で報道してもらい、地域に発信をしています。

瀬戸南高校では、N I E (Newspaper In Education) の取組をしており、より読みやすい新聞の作り方を学習し、それを生かした農ク新聞の発行を行っています。

高梁城南高校では、近隣の大学・高校と連携した合同行事「キャンドルナイト in 高梁」を毎年開催しています。

8 まとめ

以上、様々な農業に関する活動を行っており、その都度、新聞に取り上げられたり、ホームページで紹介したりしていますが、その発信力は、まだまだ力不足だと感じています。

興陽高校では、発信力強化のためにまずは顔の見える啓発ポスターに着手していきたいと考えています。また、目を引くようなインパクトのある新聞を作り、ポスターとともに近隣の小学校に配布したり、イベント時に展示ブースを活用したりしたいと考えています。そして、今のSNS社会を鑑み、マスコットキャラを作り、インスタ映えするような、展示ブースを作るなど、足を運んでももらえるような企画をしたいと思います。

今までのように、たくさんの交流をただ行うだけで無く、その場で何を伝えるか、新しいメディアによる発信技術をどう取り入れていくかを考え、私たち高校生が今や関心を持っているSNSやy o u t u b eを最大限に活用すべきだと考えています。FFJの歌が全国で着目を浴びたことから、農業には魅力あるコンテンツがたくさんあると思うのです。皆さんのアイデアを形にしましょう。